総合都市研究　第54号　1994

Ⅳ　地域住民の水辺環境認識と水辺環境の保護

—都民の水環境意識調査報告その4—

1．問題提起：水辺環境の保全運動の展開から
2．水辺環境への意味づけの構造
3．まとめ：水辺環境保全の焦点

柏　谷　　至*

要　　約

本論文は、「都民の水環境意識調査」の中から、川や湧水、池や沼などの水辺環境の保全をめぐる住民の意識について、その構造と動態を把握することを目標としている。

1970年代に始まる多摩地区の水辺環境保全運動の展開は、環境に対する住民の主体的関与と意味づけが、自然環境の保全にとって極めて重要な意義を持つことを示している。はじめの節では、人間の生活に密着した、半ば人工的な自然の保護を争点としたこれらの運動が持つ特性を、その担い手、主張の正当性の根拠、運動目標、運動形成の契機といった観点から論ずる。そして、環境に対する住民の主体的関与を強調するこれらの運動が、原生的な自然や学術的に貴重な自然の保護を争点とした既存の自然保護運動とは異なった性質をもつことが示される。

第2節では、意識調査の結果をもとに、都市住民と水辺との関わりの変化がもたらした、調査対象者の環境認識の変化を明らかにする。身近な水辺に対する感受性の年齢層による違いは、現代人の水との関わりが急速に変質し、直接的な経験を失うとともに、日常的な生活の場を離れた非日常的な性質を持つようになってきたことから説明される。さらに、水辺環境のもつ正負両面を認知する両価的で複合的な視点にかわって、より若い年齢層では、水辺に対する一般的な無関心や、水辺に対する漠然とした好イメージが見られることが示される。

最後に、1980年代に始まった社会的流行としての「水辺復権」の動きが、住民の主体的な関与と意味づけという観点から評価される。さらに、水に関わる過去の経験を蓄積し継承しようとする、今日の水辺保全運動の動向についても報告する。

1．問題提起：水辺環境の保全運動の展開から

今回の水環境意識調査の調査対象となった三鷹市、府中市を含む多摩地区の自然環境の中で、川や湧水、池や沼などの水辺環境は重要な位置を占めている。多摩地区の地形は、多摩川が運んできた土砂が形成した沖積低地と、多摩川の浸食が形

*筑波大学大学院（博士課程）

成した2つの河岸段丘―高い方から武蔵野面と立川面―によって特徴づけられる。そして、段丘の縁には2つの崖線―府中崖線と国分寺崖線―が走り、それに沿って点々と湧水が見られる。現在でも、国分寺から崖線沿いを流れ、世田谷区で多摩川に合流する野川や、環境庁の名水百選に選定された真姿の池などは、いずれも湧水を水源としている。それ以外にも、かつては多くの川や池・沼が湧水を水源とし、農業用水としてだけではなく、飲み水や洗いものなどの生活用水としても用いられるほどの清流であった。

1970年前後から急速に高まってきた環境問題への関心を背景にして、多摩地区でも自然保護を目指す市民運動・住民運動が生まれてきたが、これらの運動は、常にこの地域に残された水辺環境の保全をその中心的な争点としてきた。

その代表的な例としては、1970年、狛江市の自動車道路建設計画への反対運動に端を発して、多摩川流域の河原の自然公園化を目指した、「多摩川ぞい自動車道路建設に反対する会」とその後身の「多摩川の自然を守る会」の活動がある。この運動は、河原を造成し運動場や公園として整備するのではなく、自然のままの植生を残し、子供が遊んだり自然観察をすることのできる空間を維持して行こうと主張した。また、野川の浄化とその水源である湧水の保全を目的に設立された「三多摩問題調査研究会」は、湧水を生かした庭園である殿ヶ谷戸庭園（国分寺市）や滄浪泉園（小金井市）を都立公園として保全する運動や、地下水脈の分断や汚染への懸念から仙川小金井分水路工事に反対する運動に取り組んできた[1]。

このような多摩地区の水辺環境の保全運動がユニークなのは、まず、これらの運動が、河原や都市に残された緑地といった、人間の生活に密着している自然環境の保護を、運動の中心的な争点として取り上げた点にある。従来の自然保護運動は、主に、人間の手が触れていない原生的な自然や、学術上貴重な動植物・植生の保護を争点としてきた。したがって問題となる地域も都市から遠く離れていることが多く、また保護運動の組織も一部の自然科学者や自然愛好家、学生たちによって担われることが多かった。

それに対し、この地域の運動が提起したのは、都市から遠く離れた山奥の自然ではなく、むしろ、人間によって改変された結果生じ、あるいは人間の働きかけによってはじめて維持されるような、半ば人工的な自然環境の保護である。日本の自然保護の歴史の中で、原生自然や学術上の観点から見れば「ただの原っぱ」にすぎない河原や、都市の庭園に見られる緑の保全が争点となったのは、1970年代に多摩地区で展開された一連の運動が最初であると言ってよい。そして、これらの運動組織を支えたのが、主婦や自治体職員、会社員など、その地域に居住する人々であった点でも、従来の自然保護運動とは性質を大きく異にしているのである[2]。

他方、当時大都市における環境問題の中心は、大気汚染や工場排水といった公害問題と、急速な都市化に伴う劣悪な住環境の問題であった。これらの環境問題は、都市を紛争の現場とし、被害を直接被る地域住民たちの運動を通じて提起された点では、多摩地区の水辺環境保護と共通する側面を持っている。実際、上述の2つの自然保護運動も、道路の開通に伴う大気汚染や騒音、あるいは分水路建設工事で使用される地盤凝固剤による地下水汚染といった問題を提起し、公害反対運動と部分的に重なり合っていた。

しかし、水辺環境の悪化は、公害に伴う健康被害のように人体に直接的・甚大な影響を及ぼすような性質のものではない。逆に悪臭や洪水、転落事故のように、水辺環境のもつマイナス面が人間に直接的・甚大な影響を及ぼすことも多いのである。その結果、1960年代から東京の多くの水辺は、これらのマイナス面を理由に、川岸をコンクリートで固められ、柵で囲われ、あるいは暗渠とされて人々の暮らしから遠ざかっていった。この点で、水辺環境の保護を争点とする場合、自らの主張の正当性は、当時の公害反対運動の場合とは別のところに求められなくてはならない。

このような状況の下で、水辺環境の保護運動が自らの正当性の拠り所としたのは、環境に対する住民の主体的関与の蓄積であった。すなわち、そ

の水辺が守られなくてはならないのは、それが周辺に住む人々の住環境の快適さに寄与しているからであり、また、地域住民によって日常的に営まれてきた水辺とのかかわり合いが、他のなにものにも代えがたいと感じられるからである。「貴重な動植物」という意味づけが、その中で主張されることはあるが、それが語られる文脈は以前とは異なっている。

すなわちこれらの「貴重な」存在は、それ自体の内在的価値よりは、むしろそれが周辺の人々に誇りの感情を呼び起したり、そこを中心にさまざまな活動が展開されていることを理由に保全されるべきものとされるのである。

したがって、水辺環境の保護運動が、その水辺から人間の営みを排除し自然を手つかずのまま保護しようとすることはない。逆に、水辺に対する開かれた自由なアクセスの保障が、この運動の運動目標となるのである。市民団体が掲げた「水辺の空間を市民の手に」というスローガンは、このような水辺保護運動の性格を的確に表現している。

このような新しいタイプの自然保護運動は、どのようにして形成されたのか。身近な自然のよさは、ただ漫然と眺めているだけでは分からない。さらに、これらの運動の担い手の多くは、多摩地区の都市化・宅地化に伴って新しくこの地域に居住するようになった、いわゆる新住民であり、はじめから地元の水辺に親しみを持って接していたわけではなかった。そこには、身近な自然の再発見の過程があり、この過程は具体的な生活実践のなかで生ずる。冒頭で紹介した2つの水辺保護の運動の場合、それは自然観察会で河原に棲息する野鳥の種類の多さに驚いたり、日頃の散歩のなかで水辺の四季のうつろいや環境の微妙な変化に気づくことであった。このような身近な自然の再発見という契機の存在も、新しいタイプの自然保護運動が共通に備えた特徴として指摘できるであろう。

以上のように、本節では、多摩地区に展開した水辺保護の市民運動を例にとりながら、環境に対する住民の主体的関与と意味づけがもつ意義について議論した。しかしこのような観点は、自然保護運動の運動戦略上の有効性という点で意義を持つだけではない。環境に対する主体的関与の有無やその性質について検討することは、環境問題を発生させあるいは解決する社会的メカニズムを解明することを目指す、環境問題への社会科学的アプローチには不可欠の作業である[3)]。しかも、人口が稠密で、しかも自然と人間との長い関わりの歴史を持つ日本においては、問題の争点となる環境のほとんどが、ここで見た水辺環境のように半ば人為によって形成され、維持されてきたものである。そこで第2節では、水環境意識調査の結果の中から、そのような主体的な意味づけの構造とその作用を取り出してみよう。

2．水辺環境への意味づけの構造

2．1　「身近な水辺」をめぐって

まず、住民が多摩地区の水辺に付与する意味づけの構造を把握するための切り口として、「身近な水辺」をめぐる一連の質問項目を検討してゆこう。

問3は、調査地域にある代表的な水辺の中から「もっとも身近にある水辺」を選択する質問である。回答者全体を見ると、多摩川（34.5%）や井の頭公園（15.6%）、野川（13.2%）、玉川上水（10.1%）を身近な水辺としてあげる人が多い。他方、名水百選にも選ばれ、整備が進んでいる真姿の池（3.0%）や公園（合計7%前後）を選んだ人、および「身近に水辺はない」（4.3%）と回答した人は少なくなっている。

回答者の基本属性の中で、この質問の回答傾向をもっともよく説明できるのは、サンプリングを行った地域の違いである。すなわち、三鷹市住民では「野川」「千川」「玉川上水」「井の頭公園」を選択する人が多いのに対し、府中市住民では「多摩川」「真姿の池」「府中市郷土の森公園」「近所の公園」を選択する人が多い（表Ⅳ-1）。今回の調査の質問項目の中で、サンプリング地域による有意な差が見られた質問はあまり多くないが、この質問は、地域による回答分布の差が著しい数少な

い質問のひとつである。他方、年齢や性別・学歴など、他の基本属性による差はあまり見られなかった。「身近な水辺」を選択する基準が、あくまで地理的な距離の近さにあることがわかる。

このように、回答者の水辺についての認知は、距離の近さという客観的な要因によって規定され、誰にとっても同一の、一義的なもののように思われる。しかし、水辺に対する評価のレベルでは、問3では見られなかった、回答者の年齢層による相違を見て取ることができる。

問5では、問3で選んだ「身近な水辺」に親しみを感じた理由を、問6では身近な水辺について「不満に思うこと・困ること」を尋ねた。回答者が身近に感じる水辺についてどのような評価を下しているかを、プラス・マイナスの両面について把握することを意図した質問である。回答者全体の分布を見ると、まずプラスの評価としては、「やすらぎを感じる」(37.6%)、「開放感がある。見晴らしがよい」(20.8%)、「自然がよく残っていて、たくさんの生き物がいる」(16.0%)の3つの選択肢に集中している。他方マイナス評価としては、「水量が減ってしまった」(20.6%)、「ゴミが捨ててあって汚い」(17.5%)、「水が汚い。濁っている。悪臭がする」(16.5%) といった項目が多い。

この2つの質問に対する回答の傾向は、年齢層によって異なっている。表IV-2に見られるように、「身近な水辺」に対するプラス評価として「開放感・見晴らし」をあげる人は、特に20—30歳代に多く見られる。また、回答者全体から見れば少数派ではあるが、「レジャーや観光ができる」という回答がこの年齢層に集中している点も、注目に値する。それに対して、40—50歳代および60歳以上の年齢層に多い回答は、「自然・生き物」や「やすらぎ」である。また、身近な水辺へのマイナス評価に関しても、同様の年齢差が見られる。すなわち、20—30歳代では水質に関する不満をあげる人が相対的に多いのに対し、40—50歳代と60歳代では水量の減少をあげる人が多い (表IV-3)。

さらに厳密な比較を行うために、「身近な水辺」にあげられた選択肢ごとに、その水辺への評価を検討してみよう。表IV-4～表IV-7には、多くの人が身近だと感じている、多摩川と井の頭公園についての評価を示した。同一の水辺を選んだ人の

表IV-1　「身近にある水辺」(調査地域別)

	三鷹市	府中市
多　摩　川	3.9	64.2
野　　川	18.8	7.9
仙　　川	12.2	0.2
玉川上水	20.3	0.3
その他の川や水路	2.3	2.5
真姿の池・お鷹の道周辺	-	5.8
井の頭公園	31.3	0.5
深　大　寺	3.4	-
その他の池・沼など	0.3	0.3
府中市郷土の森公園	0.2	4.9
そのほかの自然公園	0.3	0.8
近所の公園	0.6	5.2
身近に水辺はない	3.2	5.3
合　計	597	622
(%)	100.0	100.0

表IV-2　「身近な水辺」の評価・プラス評価 (年齢別)

身近に感じる理由	20—30歳代	40—50歳代	60歳以上
水がきれいである	4.2	5.4	7.2
自然がよく残っていて、たくさんの生き物がいる	14.4	19.9	17.9
子供が水遊びや魚とりをすることができる	9.0	6.7	4.5
レジャーや観光をすることができる	7.2	1.6	2.4
やすらぎを感じる	33.8	42.9	47.4
開放感がある。見晴らしがよい	28.3	21.4	16.8
歴史のある建物や史跡が残っている	3.0	2.2	3.8
合　計	402	448	291
(%)	100.0	100.0	100.0

表Ⅳ-3　「身近な水辺」の評価・マイナス評価（年齢別）

不満に思うこと・困ること	20—30歳代	40—50歳代	60歳以上
水が汚い。濁っている。悪臭がする	23.4	17.6	10.9
水量が減ってしまった	14.8	22.4	33.8
草が延び放題になっていて見苦しい	4.0	5.1	2.8
ゴミが捨ててあって汚い	21.6	20.9	13.0
人工的で自然が残されていない	10.6	11.0	9.9
子供が入ったりすると、事故の危険がある	4.8	2.9	3.5
大雨が降ると水があふれる	0.3	-	1.1
そ の 他	4.5	2.2	4.2
不満や困ったことはない	16.1	18.0	20.8
合 計	398	455	284
(%)	100.0	100.0	100.0

表Ⅳ-4　「多摩川」へのプラス評価

	20-39	40-59	60-
水がきれい	1.4	1.1	3.1
自然・生き物	6.8	16.0	12.4
水遊び・魚とり	5.4	10.3	5.2
レジャー・観光	7.4	2.3	3.1
やすらぎ	25.7	30.3	44.3
開放感・見晴らし	52.0	39.4	32.0
建物・史跡	1.4	0.6	—
合 計	148	175	97
(%)	100.0	100.0	100.0

表Ⅳ-5　「多摩川」へのマイナス評価

	20-39	40-59	60-
水が汚い	28.5	22.5	16.0
水量の減少	12.6	19.1	26.0
草が延び放題	4.0	6.7	4.0
ゴミ	28.8	29.8	19.0
人工的	2.6	5.1	5.0
事故の危険	4.6	3.9	4.0
水があふれる	0.7	—	2.0
その他	2.0	2.2	5.0
なし	11.3	10.1	15.0
合 計	151	178	100
(%)	100.0	100.0	100.0

表Ⅳ-6　「井の頭公園」へのプラス評価

	20-39	40-59	60-
水がきれい	—	—	—
自然・生き物	18.6	20.5	25.0
水遊び・魚とり	4.3	—	4.2
レジャー・観光	11.4	—	2.1
やすらぎ	45.7	69.9	54.2
開放感・見晴らし	20.0	8.2	12.5
建物・史跡	—	1.4	2.1
合 計	70	73	48
(%)	100.0	100.0	100.0

表Ⅳ-7　「井の頭公園」へのマイナス評価

	20-39	40-39	60-
水が汚い	38.6	31.1	14.3
水量の減少	5.7	1.2	24.5
草が延び放題	—	—	—
ゴミ	20.0	17.6	10.2
人工的	1.4	5.4	6.1
事故の危険	5.7	2.7	2.0
水があふれる	—	—	—
その他	4.3	4.1	4.1
なし	17.1	27.0	26.5
合 計	70	74	49
(%)	100.0	100.0	100.0

中で比較しても、20—30歳代では「開放感・見晴らし」が、それより年配の回答者に「自然・生き物」や「やすらぎ」が、プラス評価としてより多く選択される傾向にあることがわかる。またマイナス評価についても同様で、客観的にはまったく同一の水辺に対しても、一方は水質悪化を懸念し、他方は水量の減少を不満に思う傾向が強いのである。

ここまで見てきたように、本調査の回答者は、「身近な水辺」を思い浮かべる際には、距離的な近さという、客観的で誰にとっても同一であるはずの基準を用いている。それにも関わらず、彼らがその水辺のよい（あるいは悪い）ところとしてどのような点を見いだしているか、という水辺環境の評価の枠組みの水準では、回答者の年齢という社会的要因が介在している。そしてこの差異は、その水辺の客観的な特性だけからは充分に説明のできないものである。このことは、水辺という空間に、住民のさまざまな意味づけが投影されていることの表れであると考えることができるであろう。

さらに、翻って考えるなら、前述の「身近な水辺」の選択を規定する第一の要因が、地理的な距離の「近さ」という、一見主観の入り込む余地がないような要因によって規定されているとしても、そこにも住民が水辺にこめる意味づけという要素を読みとることができないわけではない。例えばこの質問の選択肢の中で、多摩川や井の頭公園などの水辺よりも距離的には近いと考えられる「その他の川や水路」や「近所の公園」を身近な水辺にあげる人は極端に少ない。たとえそこには物理的に水が流れていても、三面コンクリート張りの水路や、公園にある池・噴水などは、もはや人々には「水辺」とは認知されていないのだと言えよう。水さえ流れていればそこが水辺なのではない。住民にとっての水辺とは、緑があり、「やすらぎ」や「開放感」を感じることのできる空間でなくてはならないのである。

2．2　水辺への関わりと感受性の変遷

このように、人々が水辺環境を評価する際には、単なる環境からの刺激―反応といった図式では決して説明できない、意味的な要因が働いている。それでは次に、それぞれの年齢層が水辺に見いだす意味がいかなるものなのか、そして、回答者のさまざまな属性の中で、なぜ年齢による差が顕著に表れるのかを、さらに詳しく検討しよう。ここで注目するのは、各年齢層（世代）が経験してきた水辺環境との接触の、質的・量的な違いである。

表Ⅳ-8　水遊びの経験（年齢別）

	20-39	40-59	60-
よく遊んだ	33.7	54.5	50.0
遊んだことがある	38.7	34.0	31.5
遊んだことがない	27.6	11.6	18.5
合　計	442	483	314
（%）	100.0	100.0	100.0

表Ⅳ-9　親しみを感じる親水場所（年齢別）

	20-39	40-59	60-
海	38.9	26.2	24.9
湖	4.3	4.4	3.9
川	47.7	62.1	63.1
池や沼	4.5	4.4	5.8
街中の水辺	4.5	2.9	2.3
合　計	442	477	309
（%）	100.0	100.0	100.0

表Ⅳ-8は年齢と子供の頃に水遊びをした経験の有無との関連を示した表である。回答者全体では、「よく遊んだ」「遊んだことがある」の合計が80%を超えており、多くの人が、水遊びの経験を持っていることを示している。しかし年齢別に見ると、20―30歳代では「よく遊んだ」と答える人の割合が他の年齢層より少なく、逆に「まったく遊んだことがない」「あまり遊んだことがない」と答える人が相対的に多い。

さらに、各年齢層が経験する水辺環境との接触には、質的側面でも違いがある。「水とふれあう場所としてもっとも親しみを感じる場所」（問2）として多くの人に選ばれたのは「川」（回答者全体の56.5%）と「海」（30.1%）であるが、40―50歳代と60歳以上の年齢層では川を選ぶ人が過半数を超えているのに対し、20―30歳代では海を選ぶ人の割合が他の年齢層より多い（表Ⅳ-9）。

20―30歳代の回答者たちは、全国的にダム建設や河川改修、郊外の都市化が進み、日本の水辺環境が大きく変化した1960年代以降に子供時代を過ごした世代である。この時期以降、小川や池・沼で泳いだり水遊びをしたりという、水辺環境との直接的な接触の機会が減少していったことは間違

表Ⅳ-10　自然にふれあう機会：日常的接触と非日常的接触の対比

	20代	30代	40代	50代	60代	70—
日常の行動の中で	26.6	37.9	40.3	47.8	45.6	51.9
ドライブ・旅行・帰省など	49.8	38.6	33.5	25.9	21.3	12.2
街中の公園や緑地	21.0	19.2	19.6	19.2	21.3	22.2
自然観察会・探鳥会	0.7	1.6	2.0	2.0	3.5	2.6
その他	—	0.9	2.2	1.1	2.4	2.1
ふれあうことがない	1.9	1.2	1.8	2.9	5.3	6.9
わからない	—	0.7	0.6	1.1	0.5	2.1
合　計	267	433	541	448	375	189
(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：『月刊世論調査』23(12)，16ページ

表Ⅳ-11　身近な水辺へのプラス評価の内容（問5）と満足度（問4）

満足度	プラス評価の内容（主なもの）自然・生き物	やすらぎ	開放感・見晴らし
満　足	27.5	19.7	15.3
ある程度満足	56.6	61.1	59.4
不　満	13.0	18.5	24.9
合　計	200	471	261
(%)	100.0	100.0	100.0

いがない。また、1960年代は、生活習慣の都市化に伴って、大衆レジャーとしての海水浴が広い範囲に定着した時期でもある。「水とふれあう場所」として海をあげる人々が、水とふれあう活動として具体的に思い浮かべているのは、おそらく海水浴であろう。これらの調査結果は、多摩地区に普通に見られるような川や池・沼などの水辺に親しむ人の割合が、量的に減ってきていることとともに、「水とふれあう」ことが、日常生活の場を離れたところで繰り広げられるような、非日常的な活動になっていることを示しているといえる。

水辺環境に限らず、一般に現代人の自然との接触が、非日常的な性格をもつ傾向にあることは、他の世論調査の結果にも表れている。例えば、総理府広報室が1991年に行った「自然の保護と利用」調査[4]では、自然とふれあうのは主にどのようなときか尋ねている（表Ⅳ-10）。

この質問への回答を年齢別に検討すると、「日常の行動の中で」の自然との接触と、「ドライブ・旅行・帰省などをしたとき」という非日常的な接触が、好対照を見せている。すなわち、40代以上の年齢層では、自然との日常的な接触の方が非日常的な接触をおおむね上回っているのに対し、若い年齢層になればなるほど日常的な接触が減って非日常的な接触が増え、特に20歳代では両者の割合が逆転しているのである。

このように、特に20—30歳代の若い年齢層では、自然との接触が間接的、かつ非日常的な性質を持っている。前節でも述べたように、身近な自然のよさは、ただ漫然と眺めて分かるものではなく、その環境に意識的に関わり、発見して行く過程が不可欠である。したがって、自然への接触が間接的・非日常的になりがちな人は、身近にある水辺環境を評価する際、例えば車や電車の窓から眺めた河原の見晴らしのよさのような、視覚的で表面的な観点からしか、プラスの評価を見いだしにくいのである。実際、身近な水辺へのプラス評価として「開放感・見晴らし」を挙げている人では、その水辺への総合的な満足度が低くなっており、「自然・生き物」を挙げる人の満足度が高いのとは対照的である（表Ⅳ-11）。

身近な水辺のマイナス面での評価に際しても、

表IV-12　水辺に対する施策（年齢別）

	20—39	40—59	60—
水質を改善し、水生生物や水鳥が棲めるようにする	87.7	86.4	81.7
蓋をして、その上を遊歩道などにする	4.8	10.5	19.9
子どもが落ちたりしないように、柵をする	13.7	20.7	36.0
子どもが遊べるような水辺にする	64.2	62.8	65.9
できるだけ手をつけないのかよい	19.9	21.2	17.0
現在の施策のままでよい	4.8	2.3	4.4
全　体	439	478	311
(%)	100.0	100.0	100.0

それぞれの年齢層の自然との関わり方の違いが影響を及ぼしていると考えられる。水質の悪化は、水の濁りや泡の発生、悪臭などによって、視覚的あるいは直感的に発見されやすい。それに対し水量の減少は、一定期間その水辺と関わっていない限り気づかれない現象である。地域の水辺環境との関係が希薄な20—30歳代の若い回答者は、水質の悪化には敏感であっても、水量の変化には気づきにくいのである。それに対し、40—50歳代や60歳以上の年齢層は、たとえ今は水辺に接することがなくなっていたとしても、人間と水辺との関わりが豊かだった昔の記憶をたどることで、若い年代層が気づかないような環境の変化を発見することができる。年齢層による身近な水辺への評価の相違は、身近にある自然環境に対する感受性の違いに起因するものと捉えることができるのである。

2．3　水辺に対する複合的な視点

水と直接的・日常的に接してきた経験は、水辺環境の良い面だけを強調するわけではない。水辺のもつマイナス面についての経験は、水辺に対する両価的で複合的な判断を生み出す。

今回の調査では、水辺環境保全のより具体的な方向性についての住民の意見を把握するために、「地域の小川・水路にかんして、都や市はどのような施策を取ればよいか」という質問（問24、複数回答）を用意した。回答者全体としては、「水質を改善し、水生生物や水鳥が棲めるようにする」（84.5%）や、「子供が遊べるような水辺にする」（63.1%）ことを望む人が多く、「子供が落ちたりしないように、柵をする」（21.7%）、「蓋をして、そのうえを遊歩道などにする」（10.8%）、そして「できるだけ手をつけないのがよい」（19.6%）とする回答者は少なくなっている。

これらの項目の中で、「蓋をする」「柵をする」の2つの項目では、年齢層による差が顕著に表れている。すなわち年齢層が高くなればなるほど、小川や水路に蓋や柵を設けることを望む人の割合が増えている（表IV-12）。子供の頃から身近な水辺に親しんできたはずの年齢層が、あたかも人間を水辺から遠ざけるかのような施策を選ぶのは、どのような理由によるのだろうか。他方で、「子供が遊べるような水辺」を求める意見は、年齢層に関わらず高いのである。

子供が遊べるような水辺を求める意見と、柵の設置や暗渠化を求める意見とは、一見矛盾しているように見えながら、実際には回答者の意識の中で共存している。例えば表IV-13は、「子供が遊べる水辺」と「柵をする」という2つの項目の間の関係を、年齢層別に分けて検討した表である。20—30歳代および40—50歳代では、2つの項目の間に関連性が見られないのに対して、60歳以上の年齢層では、子供が遊べる水辺を求めている人の方に、柵の設置を求める割合が高くなっている。つまり、この年齢層にとって、水辺に転落防止用の柵を設置することは、人々が水辺に親しむことと矛盾してはいない。むしろ水辺に親しむことを強く望む人ほど、事故防止のための施策を求めているのである。

表Ⅳ-13　「子供が遊べる水辺」と「柵をする」の関連性

「柵をする」を選択した人の割合	「子供が遊べる水辺」を選択	選択せず
20-30歳代	13.8	13.4
40-50歳代	19.7	22.5
60歳以上	44.4	19.8

60歳以上の年齢層は、水辺で遊び、身近な水辺に親しんだ直接的な経験を充分に持っている。その一方で(あるいはそれゆえに)、子供時代や自分が親世代になってからの経験を通じ、事故や洪水の危険性、ドブ川と化した水路からの悪臭などマイナス面も充分に認知していると考えられる。水辺という環境は、人間の生活にとって無条件によいものでも、無条件に悪いものでもない。従来、水辺環境に関わる政策は、人間にとって都合の悪い一面だけを強調して、水辺を改変し、人々の暮らしから遠ざけてきた。しかし反対に、水辺に対して漠然とよいイメージだけを抱き、そのマイナス面に注意を払わないなら、真の意味での自然との共存はできないであろう。その意味で、この年齢層が水辺に対して持っている両価的で複合的な判断は、注目に値するのである。

環境意識、特に環境の悪化の認知にとって、時間は本質的要素をなす。多くの場合、人々を環境保護の活動に駆り立てるのは、たとえば子供の頃から慣れ親しんだ小川が、開発によって埋められてしまう喪失感であったり、あるいは次の世代が地球上に生存できないのではないかという不安感であったりする。「身近な水辺」についての人々の意識にも、各々が経験した水辺との関わりの記憶、という時間的要素が大きな影響を与えている。より若い世代になればなるほど、自分の身近にある水辺環境に対して深く関わる意識は薄れて行く。それが帰結するのは、水辺に対する無関心か、さもなくば水辺のもつマイナス面が無視された、単純で漠然とした好イメージである。最後の節では、このような環境認識の構造変化が、水辺環境保全というテーマにどう影響を及ぼすのかを議論しよう。

表Ⅳ-14　関心のある環境問題(複数回答)

項　目	選択比率
地球温暖化・オゾン層破壊	55.3
食品添加物・残留農薬	50.4
家庭から出るゴミの増加	43.1
河川・湖沼・海洋の汚染	33.0
資源やエネルギーの浪費	25.7
都市開発に伴う緑地の減少	23.1
公害	19.6
有害産業廃棄物	17.2
水道水の水質悪化	17.4
熱帯林の破壊	14.4
野生生物の減少	13.1
その他	2.2
重要と思われるものはない	0.2
全体	1253
(%)	100.0

3．まとめ：水辺環境保全の焦点

1980年代に入った頃から、行政サイドでも水辺復権の動きが見られ始めた。隅田川の花火大会やボート競漕の復活、橋を中心とした歴史的建造物の保存やライトアップ、水面の見える堤防や遊歩道の設置などがその代表的な例である。この時期に流行した「江戸論」「東京論」においては、水は重要なキーワードのひとつとなり、東京が水の都であったことがさまざまな側面から明らかにされた。

さらに、1985年に環境庁が制定した「名水百選」を契機として、地下水や湧水への関心が高まり、「おいしい水」や「名水」がブームとなり、また家庭用の浄水器が売れ出した。本調査の回答者の中でも、全体の70%を超える人がミネラルウォーターを買ったことがあると答えているし、30%が浄水器を使用している。水に対する関心は一気に

高まり、水辺の復権は市民運動・住民運動の範囲を超えて、より大きな社会的なうねりとなって現在まで続いているかのように思われる。

しかし、水辺環境の保護に対する、本意識調査の回答者の関心は必ずしも高くない。「あなたが日頃関心を持っている環境問題」(問25)として上位に挙がっているのは、「地球温暖化・オゾン層の破壊」(55.3%)に代表される地球環境問題や、「食品添加物・残留農薬」(50.4%)や「ゴミの増加」(43.1%)のような、人々の生活により直接的な脅威となるような問題である。「河川・湖沼・海洋の汚染」(33.0%)や「都市の緑地減少」(23.1%)といった問題は、それらに比べると注目度が低くなっている(表IV-14)。

このように、現在の行政サイドから提起されている水辺復権の動きと、本論文で検討してきた水辺環境の保護との間には、ある種のズレが生じている。このズレは、本報告が中心的なテーマとしてきた、水辺環境に対する住民の主体的な関与と意味づけをどう捉えるかという点から生ずる。現在の東京の水辺復権の動きは、1970年代の市民運動が提起したような、ヒューマンスケールの中小河川の復活を意味していない。むしろ復権の対象となったのは、主として隅田川の河口部および臨海部の限定された水辺環境であり、しばしば「ウォーターフロント」の大規模開発プロジェクトと結びつけて語られた[5]。そこで重視されている水辺の特性は、人々の暮らしの蓄積よりもむしろオープンスペースとしての意義であり、「開放感や見晴らしのよさ」を感じとることのできる空間であった。

「名水ブーム」や「おいしい水」への志向にしても、それが具体的な生活の場との関わりを持たず、その意味で非日常性を帯びるなら、水辺環境の保護とは結びつきにくい。本来、水辺環境の保全は、水路や水口の維持管理、排水への配慮、水源の涵養まで、さまざまなレベルでの日常的な生活実践の積み重ねとして、はじめて可能になるからである。実際、マスメディアで取り上げられ、有名になった湧水に人々が殺到し、地元住民とのトラブルを引き起こした例は、数多く報告されている。

表IV-15　運動団体への参加協力(年齢別)

「メンバー」と「署名・カンパ」の合計	20-39	40-59	60-
自然保護・動物愛護	19.0	26.0	28.1
リサイクル活動	22.2	36.8	34.4
地域の環境問題	17.6	28.7	29.7
消費者運動	14.7	30.2	19.6
参加協力せず	63.3	47.3	47.9
全体	442	484	317
(%)	100.0	100.0	100.0

・「その他」を除く

したがって、水辺環境の復権とは、住民の主体的な関与や意味づけの復権と不可分である。その一方で、水環境意識調査の限られた質問項目からも明らかになってきたように、戦後日本の社会変動は、人間と水辺環境との関わりを変貌させ、それは現代人の環境意識に大きく影響を与えているのである。現代人の水辺との関わりが間接的で非日常的な性格を帯びてゆくとともに、彼らが認知する水辺環境も表面的に、あるいは単純かつ一面的に評価されるようになる。この変化は、主として年齢層による環境意識の相違というかたちで、調査票の中から浮かび上がってくるのである。

再び本意識調査の結果に戻ると、環境保護と関連する運動団体の活動への参加の度合いを尋ねた質問(問21)では、それぞれの年齢層が関心を持つ問題領域の違いを見て取ることができる(表IV-15)。20—30歳代の回答者は、いずれの運動体にも参加していない無回答者が圧倒的に多い。40—50歳代ではリサイクル運動と消費者運動への参加者・協力者の多さが目立つ。そして60歳代では、自然保護・動物愛護運動と地域の環境問題に関わる活動への参加者が他の年齢層より多いのである。他の章で扱われているように、運動団体への参加のような行動面の指標は、回答者が持ちうる参加機会の構造のような、その問題への関心以外の要因も作用しているのだが、それでもこのデータは、地域に密着した自然保護に関心を持つ年長の世代と、逆に環境保護全般に関心の低い若い世代、そしてその中間に、地域の自然保護にも

漠然と関心は持つが、それよりも直接的な生活上の脅威の方を優先させる世代と、それぞれの年齢層が持つ特徴をよく表しているように思われる。

最後に、水辺環境の保全という課題の将来展望にかえて、現在、多摩地区の市民運動が取り組んでいる水辺復権の試みを紹介し、本報告を終えたい。

水辺環境の保全のためには、過去における水辺への関与や意味づけを、より若い世代に伝え、あるいは新たな関与と意味づけの様式をつくり出して行くことが、重要な課題となる。第1節で触れた「三多摩問題調査研究会」は、1980年代以降、他の市民団体と協力しながら、野川流域の住民に対するアンケート調査をもとにした「野川流域マップ」づくりや、井戸や湧水の利用者や井戸掘り職人への聞き取りをもとにした「水みち調査」を行っている[6]。

いずれの調査でも、地域の水辺環境の実態だけではなく、水辺に関わる習慣や技術、出来事の記憶などが記録の対象となっている。このような試みは、かつての、水辺と密着した日常生活のようすや、水辺で遊び、身近な水辺に親しんだ直接的な経験を収集・蓄積し、後の世代に伝えられてゆくものとしても、注目すべき試みであろう。

次に引用するのは、「水みち調査」の方法論が述べられている一節だが、ここには、そこに住む人々の主観的世界を、自然科学の専門家の言葉でではなく、自分たちの言葉で捉えようとする意図が、一貫して見られる。

> 私たちは地下を知るひとつの手がかりとして、井戸を使う人々や井戸を掘った人たちに経験的にとらえられ、語り継がれてきた「水みち」という言葉に着目した。「水みち」とは、一体何なのだろう。ちょっと漠然とした概念だし、学問的にも定義されてはいない。しかし私たちはこの言葉をあえて仮説として取り上げてみることにした。そして、その経験的にとらえられている世界を、絵にしてみたいと思ったのである[7]。

そして、自然観察会が身近な自然の大切さの発見に役立ったように、これらの記憶の蓄積は、新規に流入してきた住民たちが、自らの住む地域の水辺を再発見するきっかけにもなっているのである[8]。

参考文献

1）加藤辿(1973)『都市が滅ぼした川―多摩川の自然史』中央公論社、第三部。本谷勲（編著）(1987)『都市に泉を―水辺環境の復活』日本放送出版協会。

2）人間の生活に密着した自然環境の保全という観点で、先駆的な役割を果たした自然保護運動としては、他に干潟の保護運動がある。例えば、本田カヨ子(1993)『我が青春の谷津干潟―ラムサールへの道・森田三郎・干潟を守るたたかい』崙書房を参照。

3）そのような作業の例としては、鳥越皓之・嘉田由紀子（編）(1984)『水と人の環境史―琵琶湖報告書』御茶の水書房を参照。

4）「自然の保護と利用」調査は、1991年6月20日から30日にかけて、全国の20歳以上の男女2253名を対象に行われた。この調査の結果および質問項目の詳細については、『月刊世論調査』2312［1991年12月］を参照。

5）この点に関しては、陣内秀信（編）(1993)『水の東京』岩波書店から示唆を受けた。

6）これらの調査の詳しい経緯や調査結果は、前掲の本谷(編)(1992)『都市に泉を』、および、水みち研究会（編）(1992)『水みちを探る―井戸と湧泉と地下水の保全のために』けやき出版にまとめられている。また、本報告第6論文の1．2も参照のこと。

7）前掲、水みち研究会(編)『水みちを探る』4ページ。傍点は引用者による。

8）本報告の論旨を形成する上では、上に記した参考文献の他に、多摩地区で自然保護や地下水問題に取り組んでいる市民団体のメンバーの方々のお話から実に多くのことを学んだ。ここで改めて感謝したい。

Key Words（キー・ワード）

Urban Wetlands(都市の水辺環境), Conservation Movement(自然保護運動), Perception of Environment（環境認識), Tama District, Tokyo（東京都多摩地域）

Conservation of Urban Wetlands and Residents' Perception:
Research Report on the Consciousness for Water Environment of Residents in Tokyo (4)

Itaru Kashiwaya*

*Graduate Student, Tsukuba University
Comprehensive Urban Studies, No. 54, 1994, pp. 47—59

The aim of this article is to examine the residents' perception of, and their opinion on the environment in their neighborhood, focusing on urban wetlands.

In the first section, the history of conservation movement in Tama district, western part of Tokyo metropolis, is reviewed.

Conservation of urban wetlands, i. e. rivers, streams, lakes, springs, and so on, is quite different issue from one concerning wilderness or one from a scientific viewpoint, which has been predominant of Japanese conservation movements. It is because urban wetlands have been maintained or even formed through the interaction between human and nature. In response to this new issue, conservation organization seeked for the legitimacy of its claim in the residents' commitment to the environment. Conservation movement therefore has some unique characteristics, in terms of actors, their common experiences, ideology, and goals of the movement.

In the second section, some results of opinion research are examined. Residents' ways of evaluating their neighboring wetlands are differentiated by generation. This differentiation is explained in relation to the transformation of human-wetland interaction during the period of economic growth in Japan. Younger generation tends to have less commitment to their neighboring wetlands, less concerned with it and a more superficial point of view of evaluation, while elder tends to be more committed substantially and emotionally, and be aware both positive and negative aspects of urban wetlands.

The last section includes a discussion on series of policies for 'renaissance of urban wetland'. And new strategy of the conservation movement, handing down the history of human-wetlard interaction to younger generation, is also described.